

防長の出板者、宮川臣吉の宝 ～山の石をわりて得てし玉にもあらず～

はじめに

宝物とは、時に他者には理解されがたいものかもしれません。今回の小展示では、明治時代の山口県で出板（版）業を営んだ宮川臣吉（みやがわしんきち 嘉永元 1848～大正7年 1918）の宝物について紹介します。

1 宮川臣吉

宮川については、『増補近世防長人名辞典』に概要が示されています。辞典によれば、宮川は、萩の古書肆（古書店のこと）山城屋（博古堂）を営んでいました。幼名は忠吉、のちに著頭と号します。土屋簫海・近藤芳樹の両萩藩士に師事し、書道や和歌を好みました。

明治の新時代に入っても古書肆を経営し、旧萩藩士にして郷土史家の顔も持つ近藤清石の著作をはじめとする防長の歴史に関する書籍等を多数出版しました。また、宮川は、防長日報を発刊して地方文化に資し、「資性寛厚」（しせいかんこう 温厚な性格）の人として信頼を得たと紹介されています。

没年は大正7年11月。近藤清石の死から約2年後のことでした。

2 玉の宝の正体

近藤清石の著書『霜堤葦響 卷下』（そうていあしきょう 近藤清石 25ほか）には、冒頭、「世の人の宝として見る時は宝、見ぬ時は石瓦にもおとる玉あり」、「何かしの山の石をわりて得てし玉にもあらず。くれかしの淵の砂を採りて得てし玉にもあらず」とあり、近藤清石によれば宝とは、見方によってはそのあたりに転がってありふれている石や瓦と変わらないということです。

宮川の宝物とはどういうものなのでしょうか。もう少し読み進めてみましょう。

元治元年七月、京師の役に従ひて、中立売御門に戦ひ、鼻の左側に銃傷おへるか、銃丸のかすりて過ぎけるとおもひてありけるに、廿歳余りこのとせを経て、はからずも、ぬしのからたより、自ら抜け出てたる玉になむありける。

元治元年（1864）、禁門の変に従軍した宮川は、中立売御門（なかつだちうりごもん 現京都市上京区御苑）で奮戦していたところ、自身の鼻の左側に銃創を負ったといいます。この時、宮川は銃弾が通過しただけと思ったようですが、ある日、ポロっと銃弾が身体から出てきました。

実は、鼻を負傷させた銃弾は、宮川の身体に侵入し、9年間、体内に残り続けていたのです。

宮川は71歳で生涯を終えますから、この銃弾が致命傷どころか、深刻なダメージを身体に与えることはなかったのでしょうか。

3 抜け出た宝

こういう話を知り合いから聞けば、当然もっと詳しく話を聞きたくなるものです。近藤清石は、「これをくはしくきくに」と続けてつぎのように経緯をまとめています。

これをくはしくきくに、(詳しく聞く) ことし十月
のはしめの頃より、(風邪の心地) 風のこころにて、(風邪の心地)
鼻の孔ふたかりかちにて、(ふさがりカ) しはふき
するに、いささか、血の交りたる痰の
いてければ、こころよからす思ひて
ありけるを、十一日の夜あけかたに
やありけむ。目さめたるに、なにか
あらむ、鼻の内より物の喉に入りた
るやうに思ひぬ。やかて、いみしくし
はふきして(殺入り)くるしめるか、やうやく
にねいりて、日の出つる頃起きいて
て、顔洗はむとするに、またしはふき
おとりて、はては、はらわたを吐きも
やいたさんとてまであやしまる程
に喉より物のほとはしりて、盥の中
にはたと落つるとひとしく、しはふ
きはやみけり。さて、盥の中に落ちた
る物は何にかあらむと、取りあけて
見れば、是なりけりといふ。長八分、
はは五分、あつき一分はかりにへし
けたる鉛にて、はかり目四匁五分あ
りとそ。

宮川は10月の始め頃から、風邪をひいたかのような体調になり、鼻が詰まるようになっていたそうです。咳をすれば血の混じった痰が出、これを宮川は不快に思っていました。翌日未明、宮川は目を覚まし、鼻から喉に何かが入り込んだのを感じました。それから、ひどく咳が出て宮川を苦しめましたが、少し落ち着いたため宮川は再び寝て、日が昇った頃に起床しました。起床後、宮川は洗顔するためにタライに向かいました。急に何かが喉を走る感覚があり、そしてそれはタライに落ちました。

タライから取り上げたものは、**長さ8分=2.4cm、幅5分=1.5cm、厚さ1分=0.3cm**にひしゃげた鉛でした。宮川は重さも計測しており、鉛の**重さは4匁5分=16.8g**ですから、だいたいパチンコ玉3つ分くらいです。9年間、宮川の体内(顔付近)には、鉛が入り込んだ状態でした。

おわりに

驚いて声も出ないような状況ですが、宮川は銃弾をみて、つぎの歌を詠みました。

あたりても きみころしにぬ つたなさを 耻ちてや玉の なまりありけむ
(命中したものの、死に至らしめない拙さを恥じ入る玉は、鈍っていたのだろう)

辞典では「資性寛厚」の人と評された宮川ですが、大らかというべきか、豪快というべきかそのバイタリティには、もはや感服します。

その後、宮川は近藤清石の著作を多数出版します。なかでも『大内氏実録』は、大内氏研究の草分けとして近藤清石の名を研究史に刻ませることとなります。宮川臣吉は、出板者として近藤清石の業績を世に送り続けるという、山口県の歴史文化の支え役であったとともに、強烈なエピソードを持つユニークな人物であったようです。